キャリアファイル ⑤

動物看護師（手術助手を確立）

どうぶつと飼い主さん、獣医師の真ん中にいる感覚は看護師でないと味わえないやりがいです

入社当時、手術補助のスキルが院内で確立しておらずチャンスだと考えました。

Q：現在までチャレンジしてきたことは？

働きはじめた頃から整形外科に興味があって、ずっとチャレンジを続けています。ちょうどグループが整形外科を充実させ始めた時期で、同じ病院であった磯野先生の背中を見続けてきました。整形外科は手術後、目に見えて回復するのですが、たとえば片足を地面に付けずに上げていた子が、術後すぐに（医学的にはあまり良くないことですが）自然に四つの足で立っている姿を目にすると本当に凄いと思いますし、飼い主さんが喜んでいる姿を見られるのも嬉しく思います。そんな分野に携わりたいと強く思いました。

そして当時はまだ手術助手として器具出しのスキルが院内で確立されていなかったのでここは自分が確立していこう、チャンスだと考えました。

具体的には、器具の種類をカタログなどで覚えたり、手術に関してもまずは教科書で予習して、分からないことを獣医師に尋ねるということから始めました。手術の内容ごとに手順も使う器具も違うので、とにかく覚えることが多かったですが、それが苦労というよりも楽しくて仕方がなかったです。

何より中村代表をはじめ執刀医の磯野先生、看護師長の今井さんから、どんどん任せてもらえ、手術に立つ機会もたくさんいただけたので身につけることができたと思っています。

看護師ならではの関わり方があります。

Q：獣医師でなく、なぜ看護師に？

動物医療を志したのはある動物病院に通ったのがきっかけでした。その病院では院内のすべての取り仕切りを看護師さんがやっていてとても頼もしく憧れました。

働くようになった今でも、診察室の外でも飼い主さんと関われるやりがいは看護師ならではのものだと強く感じ、やはり看護師が好きです。

医療の最後に生活に戻っていくときは看護師が関わる大切な仕事だと思います。手術の内容を理解できる立場として、リハビリにも力を入れていきたいです。

岩崎 愛女

動物看護師

［目白通り高度医療センター／動物医療センター元麻布 勤務］

- 専門学校ビジョナリーアーツ 卒
- 統一認定看護師
- 日本小動物整形外科協会認定動物看護師